

## A Case developed chronic Ileus during Pneumoperitoneum

Kesazō Niitsu

Department of Internal Medicine, Faculty of  
Medicine, Shinshu University  
(Director: Prof. T. Tozuka)

A case of a complication during pneumoperitoneum for pulmonary tuberculosis was reported.

The patient was a 22 year-old woman, who

developed chronic ileus due to ascites and adhesion of abdominal viscera, associated with erythema nodosa after about 10 months in the treatment by pneumoperitoneum. She was successfully treated by a surgical operation.

The severe adhesion was found almost in abdominal viscera and small intestine was obstructed due to the compression of ascites and sac-like adhesion in omentum.

## バセドウ氏病に見られたる脈無し病の一例

昭和31年2月8日受付

信州大学医学部丸田外科教室  
手塚 豊 穂

### 緒 言

脈無し病或は高安氏病といわれる疾患は比較的稀な疾患であつて、1908年本邦の眼科医高安氏が眼底に特有な変化を有する疾患に就いて報告したのが最初である。次いで大西氏が本症に於いて橈骨動脈々搏のふれないことを指摘してより、本症は特有な眼症状と脈搏のふれないことを主要症状とする特異な疾患として注目されて来た。1948年東大清水教授等<sup>①</sup>は本症に就いての詳細な臨牀的観察並びに病理学的所見を報告し、本症を「脈無し病」と命名した。従つて今日では一般に脈無し病なる疾患名が多く用いられ、欧米に於ける報告<sup>②</sup>にも Pulseless disease 或は Takayasu's disease と呼ばれている。余はバセドウ氏病に見られたる本症の一例を経験したので報告する。

### 症 例

山崎 某, 26才, 未婚婦人。

既往歴並びに家族歴。21才の時急性関節リウマチに罹患、医療をうけたことがある他特記すべき事項はない。

現病歴。1954年11月頃より、前頸部の腫脹、眼球突出、頻脈、心悸亢進並びに手指振蕩等の症状が現われて来たので、1955年5月7日当科を訪れバセドウ氏病と診断された。その際初めて両側橈骨動脈の脈搏を触知出来ないことを発見された。

現症。体格栄養共に中等度、著しいバセドウ症状を呈する他、特異なことは上肢の脈搏である。即ち両側橈骨動脈、尺骨動脈及び上腕動脈の搏動は全く触知出来ず、腋窩動脈に於いてその搏動をかすかにふれ得るのみである。しかし、その他の動脈々搏は明らかに正常に触知出来、殊に頸動脈、股動脈ではその搏動が著明である。

脈搏数110至。胸腹部所見では心尖部に収縮期心音不純を認める他正常。四肢には知覚異常なく、腱反射は正常。

眼底所見では本学眼科教室の検査によると、乳頭周囲の細い動静脈の吻合及び軽微な血管新生が認められた。

上肢に於ける血圧測定は不能で、下肢にて測定すると、膝窩動脈—左130~70mm/Hg, 右130~70mm/Hg, 足背動脈—左128~60mm/Hg, 右130~58mm/Hg, である。

赤沈は1時間値7耗, 2時間値17耗では正常。ツ反応陽性。血液像に特殊の所見なく、血液凝固時間9分、線維素溶解現象陽性、梅毒血清反応はワ氏反応、カーン氏反応共に陰性。尿尿に異常所見はない。

経過。本例は6月22日、甲状腺腫全切除術を施行し、経過良好でバセドウ氏病は治癒し7月27日退院した。その後、脈無し病の方は各動脈の搏動を調査すると、表1の如く5月17日、6月21日、9月19日に於ける観察では、上肢の動脈の搏動は次第に弱くなりつゝ

表1 脈 搏 の 推 移

	5月17日		6月21日		9月19日	
	左	右	左	右	左	右
浅側頭動脈	+	+	+	+	+	+
總頸動脈分岐部	卅	卅	卅	卅	+	+
總頸動脈起始部	卅	卅	卅	卅	卅	卅
鎖骨下動脈	+	+	-	-	-	-
腋窩動脈	+	+	-	-	-	-
上腕動脈	-	-	-	-	-	-
橈骨動脈	-	-	-	-	-	-

卅, 卅, +, -, は脈搏の強弱及び消失を示す

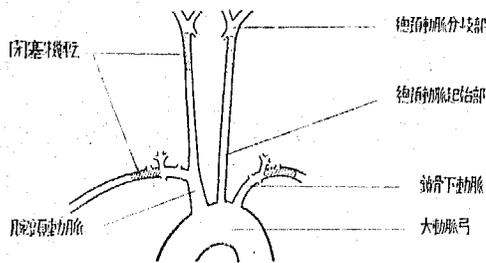
ある如くである。但し下肢等の動脈では全く変化を認めない。また、眼底所見でも9月19日の検査では、軽度ながら病勢進行の像を認めるとのことである。即ち、脈無し病は依然として進行状態にあるものと考えられる。

考 按

橈骨動脈をふれない場合、その解剖学的走行の異常によることもあろうが、かゝる場合には所謂脈無し病を考慮する必要がある。

本症の発生機転に就いては未だ不明の点が多いが、桑島<sup>③</sup>は閉塞性血栓性血管炎の一亜型とし、清水、佐野等<sup>①④</sup>は大動脈の心臓に近い部分及びそこから分枝している頸頭動脈、総頸動脈及び鎖骨下動脈等の主幹動脈群の動脈炎であろうという。従つて本症は病理解剖学的には Panarteriitis brachiocephalica cardinalis 或は Thromboarteriitis obliterans subclaviocarotica 等と呼ばれるべきであろうと述べている。恐らく動脈炎の結果として図1に示す如く頸動脈、鎖骨下動脈等に脈管腔の狭窄或は血栓形成をおこし、種々の程度にその動脈の閉塞を招来して本症に特有な症状を発生せしめるものと考えられる。尙病因として日隈<sup>⑤</sup>、江口、森<sup>⑥</sup>は結核或はそれに類する Allergie に関係ありと考え、百々<sup>⑦</sup>は内分泌系特に下垂体の障害によると報告し、また、加藤<sup>⑧</sup>、森島<sup>⑨</sup>は結核、梅毒と直接の関係はないと報告している。余の経験例はバセドウ氏病に見られたものであるが、脈無し病との間には直接の関係はないものと考えられる。

図1 脈無し病の病変発生部位



臨床的には、本症と類似の閉塞性血栓性血管炎によつて発生する特発性脱疽と比較対照すると興味深い。即ち表2の如く、特発性脱疽は中年の男子に多いが本症は若い女子に多く、余の調査した報告例58例に於いても51例が女子である。また病変部位は、前者が末梢血管殊に四肢の血管であるのに対し後者は主幹動脈群特に頸動脈及び鎖骨下動脈等である。

その他種々の点で差異が認められる。

本症に特有な症状としては<sup>①④</sup>、次の3つがあげ

表2 脈無し病と特発性脱疽との比較

	脈無し病	特発性脱疽
性・年 令	若い女性に多い	中年男子に多い
血管病変部位	上半身の主幹動脈	末梢血管 (主に四肢)
眼 底 所 見	動静脈吻合	変化なし
疼 痛	時に眼痛, 他にはない	特有なる患部の激痛
ツ 反 応	多くは陽性	無 関 係
赤 沈	多くは促進	多くは正常

られる。即ち表3の如く第1は、頸部或は上肢の脈がふれないこと。第2は、特有なる限症状が認められること。第3は、頸動脈洞反射の亢進があり、一般の洞反射亢進に於いては徐脈及び血圧下降即ち洞壁反射を主な反応としているが、脈無し病に於いては、頸動脈に壁肥厚、管腔狭窄乃至閉塞があるため、頸動脈の血液供給は主に副血行によつて居り、圧迫、伸展等によりこれら副血行を全然といわないまでも可成り遮断し易い。その結果として頸動脈本幹を圧迫した場合と同様な反応即ち失神、眩暈発作をおこし、これらのおこるのを防がんとして特有な頸部の前屈姿勢があらわ

表3. 脈無し病の三主徴

- I 脈がふれない (頸部・上肢)
- II 特有な限症状  
網膜血管吻合, 白内障, 視野の変動,  
眼圧低下等
- III 頸動脈洞反射亢進  
失神眩暈発作, 特有の姿勢  
過呼吸 (Hering 第1点刺戟)

れ、特に Hering の第一点刺戟により、頸動脈体部としての反射即ち過呼吸<sup>①④⑩⑪</sup>の状態の見られることが著しい特徴としてあげられている。その他しばしば見られる症状として、下半身の發育良好、上肢の冷感、頭髮脱落、月経異常、ツ反応陽性、赤沈の促進及び鼻中隔穿孔等がある。しかしながら本症の症状に就いては、以上の如く常に定型的なもののみでなく、板原<sup>⑫</sup>の報告せる如く非定型的なものもあると考えられる。余の例は表1に見る如く、頸動脈領域には脈搏をふれるが、上肢の動脈には脈搏を全くふれないこと、及び、甲状腺腫の手術に際して総頸動脈を検索したが、検索の範囲内では特に病的所見を認めなかつたことより、両側鎖骨下動脈に著明な変化をおこして居り、総頸動脈には変化がないか、またはあつても極めて軽度の変化に止まるものと思われる。

本症の治療法に就いては、テブロン等の自律神経遮断剤<sup>⑬⑭</sup>、或はインテレン等の副腎皮質製剤<sup>⑮</sup>も或

る程度の効果が見られるようであるが、清水教授等<sup>①</sup>によれば手術的療法として、頸動脈周囲神経叢切除術、頸動脈毯摘出術、或は根治手術として閉塞部の血栓除去術、頸動脈分岐部切除並びに静脈移植があげられている。

本症の予後<sup>④</sup>は、根治手術が可能であれば良好であるが、不可能なる場合には脳の血行不全、脳栓塞等をおこして死亡することがある。また、病変が一定のところまで停止して進行しない例に於いても、眼症状殊に白内障をおこし失明することが多いとされている。

### 結 辞

26才の未婚婦人のバセドウ氏病の診察に際して偶然発見された脈無し病の一例を経験し、これを詳細に調査した所見を述べ、併せて考按を試みた。本例は甲状腺腫全切除術によりバセドウ氏病は治癒したが、脈無し病はいまなお進行中で今後の経過が注目される。

### 文 献

①清水、佐野：臨牀外科，3，10，377，1948。 ②W. C. Caccamis：American Heart Journal，44，4，692，1952。 ③桑島：臨牀眼科，3，3，112，1949。 ④佐野：日本医事新報，1595，69，1954。 ⑤日隈：日本内科学会雑誌，41，6，370，1952。 ⑥江口、森：日本病理学会雑誌，40，総会号，1951。 ⑦百々：日本眼科学会雑誌，55，3，204，1951。 ⑧加藤：日本内科学会雑誌，40，5，289，1951。 ⑨森島：名古屋市立

大学医学会雑誌，2，4，1952。 ⑩齊藤：臨牀医報，3，4～5，145，1949。 ⑪齊藤：臨牀外科，2，3，1，1947。 ⑫板原：日本臨牀，10，1，17，1952。 ⑬土井：通信医学，3，3，287，1951。 ⑭平岩：日本内科学会雑誌，40，8，435，1951。 ⑮林：治療，37，7，798，1955。

## A Case of Pulseless Disease associated with Graves' Disease

Toyoho Tezuka

Department of Surgery, Faculty of Medicine,  
Shinshū University  
(Director: Prof. K. Maruta)

A case of Pulseless Disease was reported. The patient was a 26-year-old unmarried woman, who has been suffering from Graves' disease. In this case there was a complete absence of arterial pulsations and detectable blood pressure in the arms of both sides, and also the ophthalmological examination revealed slight peripapillary arteriovenous anastomoses. Because of these findings it is considered that the case is a atypical one of Pulseless Disease, having slight changes in the carotid arteries and severe changes in the subclavian arteries.

## 学会だより

### 第11回日本小児科学会甲信地方会

昭和31年6月17日

信州大学医学部附属病院

#### 1. ACTHを使用した再生不良性貧血の1例

大沢 亮・飯山輝次・藤原達郎 (信大)

患者は12才9ヶ月の女児。一昨年夏頃から鼻出血が時々あり、次第に顔面の蒼白が目立つようになった。入院時血液所見は赤血球数81万白血球数2,100血色素量21%，出血時間50分以上、骨髄像では有核細胞数の減少とリンパ球の相対的増多があつた。直ちに輸血を開始し葉酸、抗プラスミン剤イブシロン、V. B<sub>12</sub>、鉄を順次使用し赤血球数250万、白血球数2,400程度の貧血の回復をみたが何れも著効を示さなかつた。次でACTH点滴静注12日間総量140mgを使用、白血球数3,400となり増加の傾向をみた他末梢血液像骨髄像共に変化はなかつた。

#### 2. ボセルモンの使用経験

森 秀夫・窪田 泰・保川 康 (信大)

成長の遅れて居る乳幼児、食慾がなく体重の減少するような小児に、近年ホルモンを主体とした成長促進剤の効能が注目せられ、数多の薬剤がこの目的に用いられて居る。両性ホルモン剤「ボセルモン」(帝國臓器)もその一つで体組織形成促進作用が強力で、且つこの種の薬剤による副作用としての男性化が比較的少いとされて居る。私共は、生活状態がよく似て居ると思われる一卵性未熟双胎の一児、胃神経症と診断されたやせた年長児、及び食慾不振とやせを訴えた乳児にボセルモン1日5mg、総量50～130mgの注射を連日行つたところ、体重増加が何れも著しく、双胎の一児に於ては注射前他児より少なかつた体重か、総量120mgの注射で他児を追い越す結果となつた。又副作